

日本語学習者と母語話者の産出語彙の相違 : I-JAS の異なるタスクを用いた比較

著者	小西 円
雑誌名	国立国語研究所論集
号	13
ページ	79-106
発行年	2017-07
URL	http://doi.org/10.15084/00001373

日本語学習者と母語話者の産出語彙の相違

—I-JAS の異なるタスクを用いた比較—

小西 円

国立国語研究所 研究系 日本語教育研究領域 プロジェクト研究員

要旨

本研究は、「多言語母語の日本語学習者横断コーパス (I-JAS)」を用いて、中級レベルの日本語学習者 (以下, NNS と呼ぶ) と日本語母語話者 (以下, NS と呼ぶ) の発話を語彙の観点から比較したものである。同条件で行われた異なるタスクを対象に, NNS 群の過小使用語と過剰使用語を抽出し, 結果を質的に分析した。調査に用いたタスクは, 第三者の視点からのストーリーテリング (以下, ST と呼ぶ) 2 種と, 依頼と断りのロールプレイ (以下, RP と呼ぶ) 2 種である。分析の結果, NS 群がジャンルに適した言語産出を行うのに対して, 中級レベルの NNS 群にはそのような言語産出が見られないことがわかった。また, NNS 群と NS 群の相違として, 次のようなことがわかった。①補助動詞に関して, NNS 群の過小使用語は, ST では「ている」「てしまう」「てくる」, RP では「ていただく」「てしまう」「てもらう」があった。NNS 群の過剰使用語には「てくれる」があるが, NS 群はこれをまったく使用しない。また, 「ていただく」を用いた表現は, NNS 群と NS 群で使用形式が異なっている。②ST の時間関係の表現に関して, NNS 群の過剰使用語は「時」「後」である。NS 群はジャンルに適した多様な時間表現を用いている。③助詞に関して, NNS 群はどのタスクにおいても一貫して「は」を多用するが, NS 群は「は」と「が」を使い分け, タスクによって使い分けのルールも異なる傾向がある*。

キーワード: 学習者コーパス, I-JAS, 過小使用, 過剰使用, タスクの異なり

1. はじめに

学習者コーパスは, 外国語研究, 中間言語研究, 学習者研究などさまざまな角度から活用されるものであるが (石川 2008: 202), 本研究では, 学習者の中間言語研究に焦点を当てる。主な研究トピックの 1 つに, 学習者の過剰使用語や過小使用語などの言語的特徴に関する分析があり, 母語話者との比較によって行われることが多い (Leech 2008, 石川 2012)。これまでの日本語学習者コーパスは, 小規模なものであったり比較対象の母語話者データを備えていないものが多く, 日本語学習者 (以下, NNS と呼ぶ) と日本語母語話者 (以下, NS と呼ぶ) の複数のタスクにおける産出語彙を同条件で比較することは容易ではなかった。しかし, 2016 年に第 1 次公開が行われた「多言語母語の日本語学習者横断コーパス」 (以下, I-JAS と呼ぶ) は, 12 言語の異なる母語の NNS データを世界各地で収集しているだけでなく, NNS と同じタスクを行った NS のデータも収集・公開している。そのため, 同条件で行った NNS と NS のタスクにおける産出語彙の

* 本稿は国立国語研究所機関拠点型基幹研究プロジェクト「日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明」(プロジェクトリーダー: 石黒圭) の研究成果である。また, 本稿は第 1 回学習者コーパスワークショップ (2016 年 12 月 3 日, 国語研) における発表を基に修正・加筆したものである。なお, 特徴度の算出には, 国立国語研究所コーパス開発センターの浅原正幸准教授にご支援をいただきました。ここに記して感謝します。

比較が可能である。

本研究では、I-JASを用いて、コーパス駆動型研究（石川 2008: 69）の手法で、探索的に NNS と NS の産出語彙の相違を探ることを目的とする。NNS の過剰使用語、過小使用語を抽出したうえで、結果を質的に分析し、語彙の観点から NNS と NS の相違を明らかにする。また、タスクの違いが産出語彙に与える影響についても考察を行うため、単一のタスクにおける NNS と NS の語彙を比較するだけでなく、異なる複数のタスクにおける NNS と NS の語彙を比較する。

2. 調査対象

2.1 調査対象のタスク

I-JAS は、1 人の調査協力者に対して 7 種 12 のタスクを行っている（迫田他 2016: 98）。そのうち、発話のタスクが 4 種 6 タスク、作文のタスクが 3 種 6 タスクである。本研究では、発話タスクのうち、ストーリーテリング（以下、ST と呼ぶ）とロールプレイ（以下、RP と呼ぶ）の 2 種を調査対象とする。ST は絵を見て第三者の視点からストーリーを語る独話形式のタスクであり、「ピクニック」というタイトルの ST1、「鍵」というタイトルの ST2 がある。RP は与えられた役を演じて会話をする対話形式のタスクであり、依頼を行う RP1 と、断りを行う RP2 がある。そのため、調査対象は 2 種 4 タスクとなる。2 種 4 タスクを合わせて分析することによって、産出語彙の傾向がそれぞれのタスクの内容による個別の影響なのか、ST や RP というようなタスクの形態の影響なのかを判断することができる。

まず、ST の詳細について述べる。ST は、「対話で十分な発話量を引き出せない場合への対策、また、談話レベルでの発話ではあまり観察できない文法項目（受け身や自他動詞、複合動詞など）の使用状況を観察することを目的として実施」（迫田他 2016: 99）されたもので、独話形式のタスクとして位置づけられている。タスクは、調査協力者に図 1 や図 2 のイラストを示し、約 1 分の考える時間を与えたうえで、ストーリーを話してもらい、という手順で進められている。タイトルとストーリーの最初の 1 文は固定されており、ST1 は「ピクニック」「朝、ケンとマリはサンドイッチを作りました」、ST2 は「鍵」「ケンは、うちの鍵を持っていませんでした」である。それ以降が、調査協力者のオリジナルの発話ということになる。また、図からもわかるように、「ケン」「マリ」などの登場人物名や、「梯子」「警官」などの日本語能力試験の旧 2 級以上の名詞語には、日本語と英語の訳があらかじめ付与されている（迫田他 2016: 98）。

次に RP の詳細を述べる。RP は「学習者の日本語によるコミュニケーション能力、交渉能力を観察する目的で実施」（迫田他 2016: 100）するもので、対話形式のタスクである。日本料理店のアルバイト（調査協力者）と店長（調査者）という役割でのロールプレイで、RP1 の指示文（1）、RP2 の指示文（2）からもわかるように、RP1 は依頼、RP2 は断りという機能をターゲットとしている。調査協力者が NNS の場合、内容を正確に理解したうえで調査を行うことができるように、指示文は母語または理解可能言語による翻訳で与えられている。

(1) あなたは、飲食店でアルバイトをしています。接客スタッフとして注文を取ったり、料理

びく にっく
ピクニック (picnic)

かぎ
鍵 (Key)

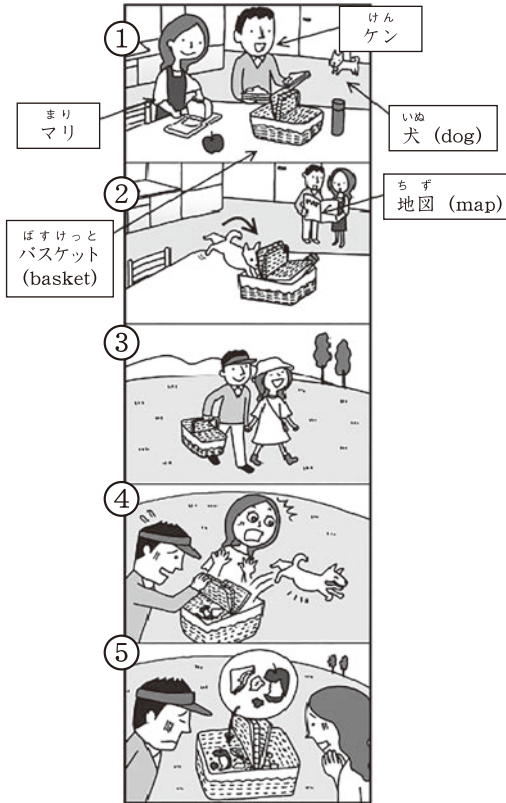


図1 ST1「ピクニック」のイラスト

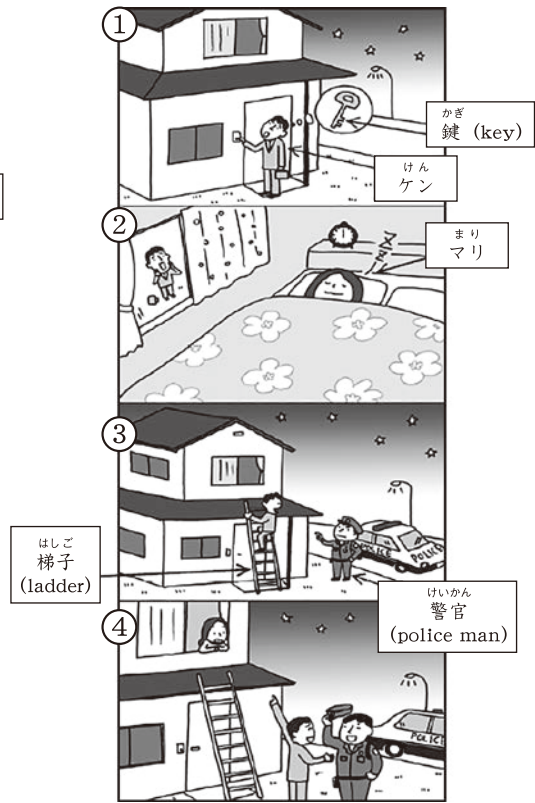


図2 ST2「鍵」のイラスト

を運んだりしています。勤め始めてからずっと接客の仕事をしてきたので、この仕事にもすっかり慣れ、知り合いのお客さまも増えました。今は、一週間に三日アルバイトをしています。しかし、忙しくなってきたので、一週間に二日に変更したいと思っています。そこで、店長に言って三日から二日に変えてもらうように頼んでください。(準備ができれば始めますから、準備ができれば教えてください。)

- (2) あなたは、飲食店でアルバイトをしています。接客スタッフとして注文を取ったり、料理を運んだりしています。店長さんから、「料理を作る人が一人やめたので、来月から料理を作る仕事を担当してほしい」と言われました。しかし、あなたは料理は苦手だし、お客さんと接する仕事がしたいので、この話を断りたいと思いました。店長に、料理の仕事の話をじょうずに断って、今の仕事を続けられるように話してください。(準備ができれば始めますから、準備ができれば教えてください。)

2.2 調査対象の NNS と NS

本研究の調査対象は、第1次公開データとして公開されている NNS 210 名と NS 15 名である。これらを NNS 群と NS 群と呼ぶ。NNS 群の内訳は、海外で収集されたデータとして、12 の異なる言語の NNS がそれぞれ 15 名で計 180 名、国内で収集されたデータとして 30 名である。NNS 群の日本語レベルは中級レベルであり、個人間の熟達度 (SPOT と J-CAT¹ で測定) に有意差がないことが示されている (迫田 2016: 198)。NNS 群との比較として扱う NS 群は、人数で見れば NNS 群の 1/14 の割合であり、やや小さいが、レベルの共通性が保証されたこれほど大規模な NNS データは他になく、その意味でも両者の比較に十分な意義がある²。

3. 分析方法

分析対象のデータは次のような手順で作成した。まず、調査対象の4つのタスクから、コーパス検索アプリケーション「中納言」を利用して、語を抽出した³。抽出した語から、「空白」「記号」「補助記号」「あいづち」「非言語行動」「解析困難箇所」⁴を除き、NS 群と NNS 群に分類したうえで、タスクごとに各群の語の頻度表を作成し、各語の特徴度を算出した。分析対象となる語数は以下の通りである。

表1 分析対象となるデータの語数

	ST1	ST2	RP1	RP2
NNS 群	27,412	31,481	39,862	40,948
NS 群	1,800	2,010	3,106	2,806

特徴度には、田中・近藤 (2011) を参考に対数尤度比を補正した数値を使用した。計算式は以下の通りである。

$$\text{対数尤度比} = 2(a \ln a + b \ln b + c \ln c + d \ln d - (a+b)\ln(a+b) - (a+c)\ln(a+c) - (b+d)\ln(b+d) - (c+d)\ln(c+d) + (a+b+c+d)\ln(a+b+c+d))$$

a : 当該資料での当該語の度数 b : 参照資料での当該語の度数

c : 当該資料の延べ語数 - a d : 参照資料の延べ語数 - b

※ ただし、 $ad-bc < 0$ の場合、 -1 を乗じる補正を行う。

¹ J-CAT (Japanese Computerized Adaptive Test) は、日本語能力自動判定テストで、聴解、語彙、文法、読解の4セクションから日本語能力を測定するものである。SPOT (Simple Performance-Oriented Test) は、TTBJ (Tsukuba Test-Battery of Japanese) の1つで、言語知識と言語運用の両面から日本語能力を測定するものである (迫田 2016: 98)。

² NS 群のデータは、I-JAS の第2次公開データ以降で最大 50 名まで拡大する予定である。

³ 中納言はバージョン 2.2.0。第1次公開のデータは 20160420 版を用いた。

⁴ 解析困難箇所を分析対象の語から除くかどうかは、判断が難しい。I-JAS における解析困難箇所は、タグ X が付与されている箇所、語の断片だけでなく、意味不明語なども含まれている。特に NNS 群の場合は、有意義語ではあるが形態素解析が行えないために意味不明語に割り当てられる語がないわけではない (迫田他 2016: 105)。しかし、本研究では語の断片を一括して除外することを優先し、解析困難箇所を分析対象から除外した。

ここで \ln は自然対数を表す。 a または b が 0 の場合、 $a \ln a$ または $b \ln b$ を 0 とみなし対数尤度比を算出する。

特徴度とは、当該資料における当該語が、他の資料（参照資料）と比べて出現度数の点でどの程度特徴的であるかを示す値である。特徴度が 0 であれば、当該資料と参照資料の出現の程度は等しく、特徴度が正の値で、かつ値が高ければ高いほど、当該資料において高頻度という意味で特徴的な語とみなされる。逆に、特徴度が負の値で、かつ値が低ければ低いほど、当該資料において低頻度という意味で特徴的な語とみなされる（田中・近藤 2011: 62）。

本研究では、当該資料を NNS 群の産出語、参照資料を NS 群の産出語とする⁵。つまり、正の値で高い特徴度を示す語は、NS 群と比較して NNS 群が過剰使用する語であり、負の値で高い特徴度を示すものは、NS 群と比較して NNS 群が過小使用する語だと言える。どちらの場合も、単なる頻度から見た高頻度語・低頻度語ではなく、両群の比較によって導き出される。

もし NNS 群が超絶レベルで、言語産出において NS 群とほとんど違いがなければ、多くの語が特徴度 0 に近い値になるはずである。しかし、本研究で扱う NNS 群は中級レベルであるため、特徴度の分析により過剰使用語、過小使用語が抽出され、それらの分析により中級レベルの NNS 群の言語的特徴が明らかになると考えられる。また、NNS 群の過小使用語は、NNS 群と比較した場合に NS 群が特徴的に高頻度で用いる語であるため、NS 群の使用の様子を分析することにより NNS 群との相違を探ることができる。そのため、NNS 群の過小使用語については NS 群の言語使用を丁寧に観察してゆくこととする⁶。

以下の分析に用いるデータは、 p 値が 0.05 以下で有意となるもので⁷、かつ、出現数が両群合わせて 5 以上の語を対象とし⁸、これを NNS 群の特徴語と位置づける。

また、以下の分析では、実質語の代表として動詞と名詞、機能語の代表として助詞の分析を行う。中納言で扱う語の単位は短単位（小椋 2014）であるため、中納言から抽出された語そのも

⁵ 当該資料と参照資料のサイズが不均等であり、かつ参照資料のほうが小さい点は望ましいことではないが、本研究では、扱う資料が同条件で行った同じタスクの集合である点を重要視している。

⁶ 特徴度を用いて NNS と NS の語を比較したものに中俣（2016）がある。中俣（2016）は、NNS と NS が対話しているコーパスを用いて、両者の使用語量を比較し、産出量に違いがあった副詞に対して特徴度を算出している。本研究で用いるコーパスは、NNS と NS との対話ではなく、両者がそれぞれ個別に発話したデータであるため、中俣（2016）の結果とは異なることが予想される。

⁷ 正の値の特徴度の有意水準とその臨界値は以下の通りである（高見 2003: 89）。

有意水準	0.1 (10%)	0.05 (5%)	0.025 (2.5%)	0.01 (1%)	0.005 (0.5%)	0.001 (0.1%)
臨界値	2.71	3.84	5.02	6.63	7.88	10.83

⁸ 複数のコーパスにおける語を比較する場合、コーパスに現れない語は分析の対象とできないというゼロ頻度問題がある。対数尤度比を用いて特徴度を算出する場合も、当該資料または参照資料における頻度 0 の語を計算の対象としない論考もある（石黒 2016、森 2016 など）が、本研究においては、当該資料も参照資料も同条件で行った同じタスクの集合であるため、片方にだけ現れ、片方に現れない語があるとすれば、それは過剰使用または過小使用を議論するうえで分析対象とすべき語であると考えられる。また、対数尤度比の計算式においても頻度ゼロを計算しうることが確認できているため（高見 2003）、片方で頻度 0 の語も分析対象としている。また、両群合わせて頻度 5 以上を対象とするのは、調査協力者の個人的特性や発話間違いなどによって現れる低頻度語を避けるためである。

のは、日本語教育で通常扱うような文型や表現のかたまりにはなっていない。そのため、短単位をもとにして抽出された特徴語の実例を観察し、文型に再構成してから、詳細な分析を行った。再構成の結果、動詞や名詞が機能語の一部になることもある。それらは機能語相当語と呼ぶこととし、全体を通して日本語教育に有意義な単位での分析を行う。つまり、量的調査における結果を質的に分析するという手法をとる。

以下ではまず、ST と RP における特徴度の算出結果を概観したのち、実質語と機能語の特徴をそれぞれ分析する。

4. 特徴度の算出結果

4.1 ストーリーテリングの特徴語

ST1 と ST2 の動詞、名詞、助詞の特徴語を、NNS 群の過小使用語と過剰使用語に分けて、表 2～7 に示す。どの品詞も過小使用語のほうが多かったため、過小使用語から順に示す。表中の「NNS 群」「NS 群」に、各群における当該語の出現数を示す。NNS 群と NS 群は母集団のサイズが異なるため、1000 語あたりの調整頻度（ここでは仮に per thousand words の頭文字を取って PTW とする）も示す。語は短単位の辞書である UniDic の語彙素の表記に準じて記し、適宜ふりがなをふる。また、各表において ST1 と ST2 に共通して現れている語には下線を付す。

表 2 ST の動詞の過小使用語

	ST1	特徴度	NNS 群	NS 群	NNS 群 PTW	NS 群 PTW	ST2	特徴度	NNS 群	NS 群	NNS 群 PTW	NS 群 PTW
1	出掛ける	-29.77	17	12	0.6	6.7	<u>遣</u> る	-21.54	10	8	0.3	4.0
2	<u>居</u> る	-22.96	200	35	7.3	19.4	<u>為</u> る	-11.97	405	46	12.9	22.9
3	来る	-19.07	66	17	2.4	9.4	来る	-10.71	141	21	4.5	10.4
4	飛び出す	-6.93	38	8	1.4	4.4	開く	-7.58	9	4	0.3	2.0
5	驚く	-6.30	11	4	0.4	2.2	気付く	-6.93	31	7	1.0	3.5
6	<u>仕舞</u> う	-4.01	161	18	5.9	10.0	<u>貰</u> う	-6.92	5	3	0.2	1.5
7							<u>仕舞</u> う	-6.35	79	12	2.5	6.0
8							見付かる	-5.57	13	4	0.4	2.0
9							掛ける	-5.28	21	5	0.7	2.5
10							押す	-5.17	14	4	0.4	2.0
11							出す	-4.98	8	3	0.3	1.5
12							付く	-4.98	8	3	0.3	1.5
13							<u>居</u> る	-4.53	579	51	18.4	25.4
14							解ける	-4.11	4	2	0.1	1.0

表 3 ST の動詞の過剰使用語

	ST1	特徴度	NNS 群	NS 群	NNS 群 PTW	NS 群 PTW	ST2	特徴度	NNS 群	NS 群	NNS 群 PTW	NS 群 PTW
1	飛ぶ	5.73	45	0	1.6	0.0	見る	12.65	154	1	4.9	0.5
2							聞く	9.54	77	0	2.4	0.0
3							聞こえる	7.56	61	0	1.9	0.0

表 4 ST の名詞の過小使用語

	ST1	特徴度	NNS 群	NS 群	NNS 群 PTW	NS 群 PTW	ST2	特徴度	NNS 群	NS 群	NNS 群 PTW	NS 群 PTW
1	飼い犬	-39.04	0	7	0.0	3.9	階	-46.24	53	24	1.7	11.9
2	弁当	-29.16	7	9	0.3	5.0	二	-27.01	127	28	4.0	13.9
3	間	-12.70	28	9	1.0	5.0	Ⅱ	-19.23	5	6	0.2	3.0
4	Ⅱ	-9.40	11	5	0.4	2.8	所	-17.93	14	8	0.4	4.0
5	中	-6.43	203	24	7.4	13.3	御巡り ^{おまわ}	-13.84	10	6	0.3	3.0
6	今日	-6.30	11	4	0.4	2.2	事情	-11.01	9	5	0.3	2.5
7	目的	-6.03	6	3	0.2	1.7	一	-7.70	62	11	2.0	5.5
8	地	-6.03	6	3	0.2	1.7	気	-7.58	9	4	0.3	2.0
9	終わり	-5.40	7	3	0.3	1.7	番	-5.53	7	3	0.2	1.5
10	途端	-5.40	7	3	0.3	1.7	質問	-5.53	7	3	0.2	1.5
11	確認	-4.02	4	2	0.1	1.1	外	-4.58	32	6	1.0	3.0
12	中身	-4.02	4	2	0.1	1.1	注意	-4.50	9	3	0.3	1.5
13	さっき	-4.02	4	2	0.1	1.1	人	-4.45	24	5	0.8	2.5
14							ピンポン	-4.11	4	2	0.1	1.0

表 5 ST の名詞の過剰使用語

	ST1	特徴度	NNS 群	NS 群	NNS 群 PTW	NS 群 PTW	ST2	特徴度	NNS 群	NS 群	NNS 群 PTW	NS 群 PTW
1	時	27.58	216	0	7.9	0.0	時	20.38	263	2	8.4	1.0
2	食べ物	8.66	147	2	5.4	1.1	後	7.19	58	0	1.8	0.0
3	全部	6.47	152	3	5.5	1.7	泥棒	6.73	131	2	4.2	1.0
4	後	6.11	121	2	4.4	1.1	内	5.00	402	15	12.8	7.5
5	散歩	5.60	44	0	1.6	0.0	ケン	4.99	1061	50	33.7	24.9
6	犬	4.07	722	34	26.3	18.9						

表 6 ST の助詞の過小使用語

	ST1	特徴度	NNS 群	NS 群	NNS 群 PTW	NS 群 PTW	ST2	特徴度	NNS 群	NS 群	NNS 群 PTW	NS 群 PTW
1	と(接続)	-37.34	50	21	1.8	11.7	から(格)	-16.49	128	23	4.1	11.4
2	て(接続)	-21.34	891	98	32.5	54.4	て(接続)	-15.42	1566	142	49.7	70.6
3	が(格)	-6.26	530	51	19.3	28.3	が(格)	-13.77	444	51	14.1	25.4
4	や(副)	-3.95	10	3	0.4	1.7	の(格)	-13.61	612	65	19.4	32.3
5							と(格)	-13.42	413	48	13.1	23.9
6							と(接続)	-11.95	61	13	1.9	6.5

表 7 ST の助詞の過剰使用語

	ST1	特徴度	NNS 群	NS 群	NNS 群 PTW	NS 群 PTW	ST2	特徴度	NNS 群	NS 群	NNS 群 PTW	NS 群 PTW
1	は(係)	10.07	1289	57	47.0	31.7	は(係)	17.72	1590	62	50.5	30.8
2	から(接続)	5.47	43	0	1.6	0.0	から(接続)	13.52	199	2	6.3	1.0

まず、動詞から見ていく。表2から、NNS群の過小使用語が常に難易度が高いとは言えないことがわかる。「リーディングチュウ太⁹」を用いて語のレベル判定を行ったところ、動詞の過小使用語には、中級相当のNNS群には難しいと思われる日本語能力試験のN1や級外の語は現れていなかった。また、ST1とST2に共通して現れる語（下線部）に限って見ると、動詞の過小使用語では、「居る」「来る」「仕舞う」が共通して現れているが、NS群の使用例を見ると、これらは本動詞としての使用ではなく、補助動詞「ている」「てくる」「てしまう」としての出現がほとんどである。過剰使用語には「飛ぶ」があるが、過小使用語に複合動詞の「飛び出す」があることと対比的である。

次に名詞を見る。表4の名詞の過小使用語には、「飼犬」（級外）のように難易度が高い語が見られる。難易度が高いとは思われない語であっても、NS群では、数字として用いられる以外の「一」は「一件落着」、「質問」は「職務質問」として用いられており、表現のまとまりとしての難易度は高い。表4におけるNS群の頻度を見ると、名詞は動詞や助詞と比較して低頻度語が多い。NS群の調査協力者それぞれの個性が反映されていると言える。また、「JJ」は調査IDの一部であるが、そのような調査に関連する語もリストに挙がっている¹⁰。また、名詞の過剰使用語にはST1、ST2どちらにも「時」「後」があり、これらは時間関係を表す従属節を構成する接続助詞相当として用いられている。

次に助詞を見る。表6の助詞の過小使用語では接続助詞と格助詞が目立っており、「て（接続助詞）」「と（接続助詞）」、「が（格助詞）」がST1とST2で共通している。助詞の過剰使用語では理由を表す「から（接続助詞）」、「は（係助詞）」がST1とST2で共通している。

ST1とST2に共通して現れる特徴語は、過小使用語・過剰使用語のどちらにおいても機能語として働くものが多い。これらの語やそれを用いた表現は、NNS群とNS群の差異が浮かび上がりやすい箇所であると考えられる。

4.2 ロールプレイの特徴語

次に、RP1とRP2の動詞、名詞、助詞の特徴語を、過小使用語と過剰使用語に分けて、表8～13に示す。また、各表においてRP1とRP2に共通して現れている語には下線を付す。

⁹ <http://language.tiu.ac.jp/>

¹⁰ 「JJ」という語がNS群に多いのは、NSの調査IDが「JJJ」であったことによる。NNSにも「JJN」「JJC」というIDの話者がいるが、相対的にNS群のほうが多い。

表 8 RP の動詞の過小使用語

	RP1	特徴度	NNS 群	NS 群	NNS 群 PTW	NS 群 PTW	RP2	特徴度	NNS 群	NS 群	NNS 群 PTW	NS 群 PTW
1	言う	-37.32	82	29	2.1	9.3	言う	-62.55	118	42	2.9	15.0
2	頂く ^{いなか}	-33.23	74	26	1.9	8.4	頂く ^{いなか}	-35.58	11	12	0.3	4.3
3	入れる ¹¹	-25.03	3	7	0.1	2.3	入る	-16.95	24	10	0.6	3.6
4	入る	-20.85	24	12	0.6	3.9	仕舞う ^{しま}	-12.32	16	7	0.4	2.5
5	掛ける	-12.69	9	6	0.2	1.9	遣る ^や	-11.75	65	14	1.6	5.0
6	考える	-12.16	14	7	0.4	2.3	向く	-5.82	6	3	0.1	1.1
7	減らす	-10.37	17	7	0.4	2.3	回る	-4.66	3	2	0.1	0.7
8	変える	-9.79	36	10	0.9	3.2	受ける	-4.66	3	2	0.1	0.7
9	仕舞う ^{しま}	-9.20	14	6	0.4	1.9						
10	知れる	-8.68	10	5	0.3	1.6						
11	思う	-7.57	236	32	5.9	10.3						
12	貰う ^{もら}	-7.37	37	9	0.9	2.9						
13	慣れる	-6.32	9	4	0.2	1.3						
14	来る	-6.02	100	16	2.5	5.2						
15	見る	-4.79	40	8	1.0	2.6						

表 9 RP の動詞の過剰使用語

	RP1	特徴度	NNS 群	NS 群	NNS 群 PTW	NS 群 PTW	RP2	特徴度	NNS 群	NS 群	NNS 群 PTW	NS 群 PTW
1	働く	31.75	301	2	7.6	0.6	話す	21.56	217	1	5.3	0.4
2	有る	8.11	323	12	8.1	3.9	作る	13.64	299	6	7.3	2.1
3	呉れる ^く	3.90	26	0	0.7	0.0	働く	8.89	67	0	1.6	0.0
4							居る	6.25	191	5	4.7	1.8
5							聞く	6.23	47	0	1.1	0.0
6							困る	4.64	35	0	0.9	0.0
7							知れる	4.24	32	0	0.8	0.0

¹¹ 形態素解析の結果得られた語彙素「入れる」は「いれる」であるが、実際の I-JAS のデータでは「はいれる」が用いられている。I-JAS のデータ上では、複数の読みのある漢字語に対するタグ Y で「はいれる」という読みの注記が付されているが、形態素解析時には適応されないため、このような解析結果になっている。

表 10 RP の名詞の過小使用語

	RP1	特徴度	NNS 群	NS 群	NNS 群 PTW	NS 群 PTW	RP2	特徴度	NNS 群	NS 群	NNS 群 PTW	NS 群 PTW
1	<u>ほう</u> 方	-36.45	25	17	0.6	5.5	接客	-73.04	15	22	0.4	7.8
2	週	-32.80	158	39	4.0	12.6	<u>ほう</u> 方	-56.91	112	39	2.7	13.9
3	<u>じ</u> じ	-22.37	7	8	0.2	2.6	ホール	-38.34	27	17	0.7	6.1
4	迷惑	-17.13	5	6	0.1	1.9	力	-27.36	1	6	0.0	2.1
5	調整	-13.68	2	4	0.1	1.3	<u>じ</u> じ	-19.99	7	7	0.2	2.5
6	申し訳	-12.90	40	12	1.0	3.9	調理	-19.47	55	16	1.3	5.7
7	シフト	-12.69	9	6	0.2	1.9	気	-18.48	5	6	0.1	2.1
8	変更	-10.42	12	6	0.3	1.9	感じ	-17.11	1	4	0.0	1.4
9	自分	-6.96	13	5	0.3	1.6	所	-15.05	12	7	0.3	2.5
10	話	-4.89	18	5	0.5	1.6	風	-14.61	2	4	0.0	1.4
11	物	-4.23	3	2	0.1	0.6	<u>かた</u> 方	-9.31	6	4	0.1	1.4
12	来月	-4.18	43	8	1.1	2.6	タナカ	-5.57	12	4	0.3	1.4
13	今日	-4.07	8	3	0.2	1.0	逆	-4.66	3	2	0.1	0.7
14							一	-4.25	98	13	2.4	4.6
15							申し訳	-3.88	51	8	1.2	2.9
16							<u>つも</u> 積み	-3.88	4	2	0.1	0.7

表 11 RP の名詞の過剰使用語

	RP1	特徴度	NNS 群	NS 群	NNS 群 PTW	NS 群 PTW	RP2	特徴度	NNS 群	NS 群	NNS 群 PTW	NS 群 PTW
1	日	34.31	228	0	5.7	0.0	<u>日本</u>	39.38	296	0	7.2	0.0
2	週間	22.37	232	2	5.8	0.6	語	19.79	149	0	3.6	0.0
3	最近	21.35	142	0	3.6	0.0	料理	12.94	761	28	18.6	10.0
4	友達	19.39	129	0	3.2	0.0	<u>友達</u>	12.34	93	0	2.3	0.0
5	試験	15.18	101	0	2.5	0.0	店長	10.89	129	1	3.2	0.4
6	大学	13.04	130	1	3.3	0.3	事	8.87	398	13	9.7	4.6
7	回	11.19	282	8	7.1	2.6	本当	6.69	219	6	5.3	2.1
8	日間	10.03	136	2	3.4	0.6	キッチン	6.50	49	0	1.2	0.0
9	勉強	9.55	132	2	3.3	0.6	<u>レストラン</u>	6.50	49	0	1.2	0.0
10	四	8.28	94	1	2.4	0.3	練習	5.70	43	0	1.1	0.0
11	卒業	7.66	51	0	1.3	0.0	実	5.33	80	1	2.0	0.4
12	<u>日本</u>	6.16	41	0	1.0	0.0	得意	4.77	36	0	0.9	0.0
13	代わり	5.71	38	0	1.0	0.0	ウエートレス	4.77	36	0	0.9	0.0
14	<u>レストラン</u>	5.55	37	0	0.9	0.0	時間	4.58	73	1	1.8	0.4
15	紹介	5.40	36	0	0.9	0.0	<u>紹介</u>	4.24	32	0	0.8	0.0
16	三	5.35	577	30	14.5	9.7	台所	4.11	31	0	0.8	0.0
17	金曜	5.10	34	0	0.9	0.0						
18	月曜	5.10	34	0	0.9	0.0						
19	授業	4.95	33	0	0.8	0.0						
20	土曜	4.95	33	0	0.8	0.0						
21	二	4.87	598	32	15.0	10.3						
22	語	4.65	31	0	0.8	0.0						
23	八	4.20	28	0	0.7	0.0						
24	客	3.90	26	0	0.7	0.0						
25	一	3.87	391	20	9.8	6.4						

表 12 RP の助詞の過小使用語

	RP1	特徴度	NNS 群	NS 群	NNS 群 PTW	NS 群 PTW	RP2	特徴度	NNS 群	NS 群	NNS 群 PTW	NS 群 PTW
1	<u>の(準体)</u>	-69.79	538	110	13.5	35.4	<u>って(副)</u>	-79.98	35	30	0.9	10.7
2	<u>な(終)</u>	-49.36	30	22	0.8	7.1	<u>の(準体)</u>	-58.29	642	106	15.7	37.8
3	<u>って(副)</u>	-43.97	21	18	0.5	5.8	<u>な(終)</u>	-28.38	53	19	1.3	6.8
4	<u>て(接続)</u>	-32.59	910	126	22.8	40.6	<u>ね(終)</u>	-28.17	334	54	8.2	19.2
5	<u>ね(終)</u>	-29.91	267	52	6.7	16.7	<u>よ(終)</u>	-16.52	102	21	2.5	7.5
6	けれど(接)	-17.16	316	49	7.9	15.8	の(格)	-8.11	888	85	21.7	30.3
7	も(係)	-15.77	644	82	16.2	26.4	<u>て(接続)</u>	-7.49	679	67	16.6	23.9
8	と(格)	-13.67	468	62	11.7	20.0	か(終)	-6.31	506	51	12.4	18.2
9	<u>よ(終)</u>	-11.36	58	14	1.5	4.5						
10	ば(接続)	-10.12	143	24	3.6	7.7						
11	と(接続)	-7.12	31	8	0.8	2.6						

表 13 RP の助詞の過剰使用語

	RP1	特徴度	NNS 群	NS 群	NNS 群 PTW	NS 群 PTW	RP2	特徴度	NNS 群	NS 群	NNS 群 PTW	NS 群 PTW
1	<u>から(接続)</u>	45.49	302	0	7.6	0.0	<u>は(係)</u>	34.96	1694	58	41.4	20.7
2	<u>は(係)</u>	35.75	1196	41	30.0	13.2	<u>から(接続)</u>	34.10	360	2	8.8	0.7
3	が(格)	24.41	743	24	18.6	7.7	を(格)	15.39	719	24	17.6	8.6
4	か(終)	6.31	580	29	14.6	9.3	なんか(副)	4.77	36	0	0.9	0.0
5	だけ(副)	5.98	124	3	3.1	1.0						

まず、動詞を見る。STと同様に、過小使用語に難易度の高い語は少ない。「知れる」は「かもしれない」の一部である¹²。「言う」は、「って(副助詞)」と組み合わせられて「っていう(こと、ふう等)」のような形で用いられることが多い。また、「頂く」「仕舞う」「貰う」「遣る」などは、NS群では、本動詞ではなく「ていただく」「てしまう」などの形で補助動詞として使われる例がほとんどである。「頂く」と「仕舞う」はRP1とRP2で共通している。STで目立った補助動詞は「ている」「てくる」「てしまう」だったことを考えると、RPでは授受に関する語が目立っている¹³。一方、過剰使用語には、授受表現として「呉れる」があり、NNS群では「呉れる」の約7割は「てくれる」の形で用いられている。これは、過小使用語に恩恵を受ける側である話者が主語の位置にくる「てもらう」「ていただく」の2語があり、NS群でこれらが用いられていることと相補分布をなしている。NS群では、動作主が主語の位置にくる「てくれる」はまったく使われていない。

次に、名詞を見る。過小使用語には「迷惑」「調整」「変更」などN2-3レベルの語が多く、「シフト」(級外)、「接客」(級外)、「ホール」(N1)、「調理」(N1)のように中級レベルを超える語もある。

¹²「かもしれない」は短単位では「か」「も」「しれない」に分かれる。

¹³NS群RP2にある「遣る(やる)」は、「接客業のほうがやりたいです」のように「する」の意味で用いられており、授受表現の「てやる」ではない。

過剰使用語にはNS群での頻度が0であるものが多い。RP1とRP2に共通する語として「日本」「語」「友達」「紹介」があり、NS群での頻度が0であるが、これは、依頼や断りの会話の中で「自分の勤務日を減らす代わりに友達を紹介する」(RP1)、「自分は日本語が話したいからホール勤務が良い」(RP2)、「自分の代わりに友達を調理担当に紹介する」(RP2)、「友達は日本語ができる(から店で働ける)」(RP1・RP2)のような内容で用いられており、NS群ではほとんど出ない内容だったことが理由だと考えられる。また、RP1の「試験」「大学」「卒業」「勉強」「授業」などもNS群での頻度が極めて低いが、これは、勤務日数を減らす理由として、大学の卒業試験、大学の授業などを挙げるNNSが多かったためである。「金曜」「月曜」などの曜日が上がっているのも、「今、私は金曜日に働いています」のように、具体的に状況説明をするNNSが多かったことによる。一方、名詞の過小使用語には、依頼や断りの理由として使用された具体的な名詞は特徴語に上がっていない。依頼や断りのための理由の述べ方など、会話構成にNNS群とNS群とで違いがあることが予想される。また、RPの名詞の特徴語は、過小使用語・過剰使用語ともにSTより多い。STがすでに与えられた絵を見て話すタスクであるのに対して、RPは依頼や断りを行うための理由づけなどをそれぞれの話者が自分の言葉で語ったことによると思われる。

次に、助詞を見る。過小使用語では準体助詞、終助詞、副助詞が多く、「の(準体助詞)」「な(終助詞)」「って(副助詞)」「て(接続助詞)」「ね(終助詞)」「よ(終助詞)」がRP1とRP2で共通している。過小使用語の「な(終助詞)」は「か(終助詞)」とともに「かな」を構成する。RP1の動詞の過小使用語に「思う」があるが、NS群では「(か) なんて思って」「～したい(な) と思って」のような形で用いられることが多く(例(3)(4))、この2形式でNS群の「思う」の総出現数の6割近くを占めている。また、NS群においては、「言う」も本動詞としての使用より、「って(副助詞)」や「と(格助詞)」と結びついて「と／っていうN」「と／っていうの」のような名詞修飾を構成する要素として使用されることが多い。これらは(5)(6)のように、直接表現を避けるような場面で用いられることがある。このように、(3)～(6)のような例は依頼や断りの交渉における婉曲表現・配慮表現として用いられている。一方、助詞の過剰使用語を見ると、「は(係助詞)」「から(接続助詞)」がRP1とRP2の両方で上位2語を占めており、STの結果と共通している。また、STでは過小使用語であった「が(格助詞)」が、RP1で過剰使用語に上がっている。

- (3) 一人で料理、やるとなると〈はい〉、少し、難しいんで、今までの、ように# ふーん# 接客がいいかなと思いますけどねー (JJJ15-RP2)¹⁴
- (4) ちょっと今日、店長に〈はい〉お願いがあって、あの一お時間いただきたいなって思ってたんですけど (JJJ30-RP1)
- (5) あの時間を少しあの〈はい〉短くしていただく〈うんうんうんうんうんうんうん〉とかい

¹⁴ 例文末尾には、調査IDとタスク記号を示す。「JJJ」はNSを示しており、その他のIDはNNSである。IDについての詳細は、迫田他(2016)を参照のこと。また、例文内に〈〉で示す部分は調査者のあいづちを示し、「#」は文区切りを示す。例文中で注目したい箇所には下線を付す。

う形で週三日はい入りますけど (JJJ15-RP1)

(6) それはもちろんいいんですけど、ちょっと苦手っていうのがあって (JJJ35-RP2)

4.3 特徴語からわかること

ST と RP の特徴語の分析から、2つのことが示唆される。

1つ目は、NNS 群の過小使用語はそれ単独の難易度が高いために過小使用になるのではなく、あるまとまりとして用いるべきであるのに、そのまとまりで使うことができていないということである。まとまりは、「職務+質問」のような実質語のかたまりから、「ている」「てしまう」のような補助動詞を構成し機能語として働くものまで幅広い¹⁵。

もう1つは、NS 群が ST と RP とで異なるタイプの言語産出を行っているのに対して、NNS 群がそのような言語産出を行えていないのではないか、ということである。4.1 と 4.2 の分析から、ST と RP の NNS 群の過小使用語は、特に機能語において異なる分布をなしていることがわかる。逆に言えば、NS 群が ST と RP で異なる機能語を用いているということになる。

助詞の過小使用語は、ST では格助詞や接続助詞が多いが、RP では準体助詞、終助詞、副助詞が多い。ST における NS 群の使用例を見ると、接続助詞は、ストーリーを語るという性質上、時間の経過に沿って語りを進めていかなければならないことと関連しており、また、格助詞は、自分の体験ではなく3人称で語らなければならないために「誰が何をした」という構文で語りを進めていくことと関連していると思われる。また、RP における NS 群の終助詞の使用や、「(か) なんて思って」「～したい(な) と思って」などの婉曲表現、配慮表現の使用は、RP が交渉の対話タスクであることと強く関わっていると考えられる。また、補助動詞も機能語の範疇に入るが、NS 群は ST で「ている」「てくる」「てしまう」などを使用し、RP では「ていただく」など授受に関する補助動詞を使用しており、これも同様の観点から説明できる。

つまり、NS 群は、ST が3人称の視点で語る独話のストーリー語りであり、RP が依頼や断りを行う交渉の対話である、というタスクの違いを反映させた言語産出を行っているのに対し、NNS 群はそうではない、と考えられる。

以下、5節で実質語、6節で機能語について具体的な例を示しながら質的な分析を行う。その中で特に上記2つ目の点をさらに検証していく。

5. 実質語の分析

NNS 群の過小使用語と過剰使用語を比較すると、「まとまり」としての使用の難しさだけでなく、よりジャンルや場面に適した語や表現の難しさがあることがわかる。(7)～(10)に ST の例、(11)に RP の例を示す。

過小使用語と過剰使用語には、ある種の相補分布をなすものがあるが、「飛び出す」と「飛ぶ」(例

¹⁵ 石川 (2008: 225, 240) は、日本語母語の英語学習者のデータを分析し、学習者が個々の語を単独で扱いがちで「既成の (prefabricated) 表現枠」として扱えないことや、学習者は孤立的な内容語に依存して発話を構築してしまうが、自然な発話を行うためには機能語の役割が重要であることを指摘している。

(7), 「気づく」と「聞こえる」(例 (8)) などはその一例である。同じ場面の描写で、NS 群と NNS 群とで使用する語が異なっている。

また、(9) の「やってくる」(動詞の特徴語「遣る」「来る」)、(10) の「ようとする」(動詞の特徴語「為る(する)」) は、ストーリーを語るというジャンルに適した表現の選択であると言える。また、(11) の「(バイトに) 入る」や「(二日に) 減らす」はアルバイト用語とも言える使い方であるが、NNS 群では「働く」「変わる」などが使用されやすい。ジャンルや場面に適切な語というのは、難易度の高い語とは限らないが、(11) のような表現は、海外で日本語を学ぶ中級レベル学習者には聞きなれない表現であろうと思われる。このように、ジャンルや場面に適した言語産出の有無は、機能語だけではなく実質語にも見て取れる。

(7) 過小使用語「飛び出す」、過剰使用語「飛ぶ」

NS) バasketを開けてみると、中から、犬が飛び出してきて、ケンとマリはとても驚きました (JJJ15-ST1)

NNS) えーとピクニックの、おー、公園に着いてからー、あーBasketを、開けてーそれがあーん、後は犬が、あー飛んでーえーっとマリさんとケンさんはすごくビックリしました (RRS57-ST1)

(8) 過小使用語「気づく」、過剰使用語「聞こえる」

NS) えー中にいる、えーマリを、呼びましたけれども、マリは寝ていて気づきません (JJJ01-ST2)

NNS) ケンはえー、えー大声でマリにえー呼びますが、ん、ん呼びますがー、えーマリは寝る、寝ますからえー聞こえません (SES05-ST2)

(9) 過小使用語「やってくる」

NS) そこに警官がやってくるてえーケンを注意しました (JJJ12-ST2)

(10) 過小使用語「ようとする」

NS) ケンは梯子を上り、二階の窓から、入ろうとしました (JJJ15-ST2)

(11) 過小使用語「(バイトに) 入る」「(二日に) 減らす」「変更する」、NNS 群「働く」「変わる」

NS-a) 今週に三回アルバイト入ってる状況なんですけど〈はい〉それを週に二回変更してもらいたくて (JJJ14-RP1)

NS-b) 今まで三日間、入ってたアルバイトを一日、減らしていただけないかと、いうお願いで (JJJ50-RP1)

NNS-a) 私はここで、一週間、三日で、働いていますが、ちょっと時間がないから、もし、一週間、二日で、働いては、いいのかなーと、思いました (FFR40-RP1)

NNS-b) 二日間にえー変わりたいと思っています (GAT16-RP1)

6. 機能語の分析

4 節の分析からもわかるように、機能語は NNS 群と NS 群との相違が大きく、タスクの違い

による影響が考えられる。本節では、機能語を①補助動詞、②時間関係の表現、③助詞の3つに大別して、STとRPにおける過小使用語と過剰使用語の質的な分析を行う。

6.1 補助動詞

4節で述べたように、名詞や動詞の過小使用語の中には補助動詞を構成するものが多い。これは、NNS群が補助動詞を適切な箇所で使用できていないことを示している。STでは「ている」「てくる」「てしまう」が過小使用語である。(12)～(14)には、NS群とNNS群がほぼ同じ場面を語った例を対比的に示す。

(12) 過小使用語「ている」

NS) えっとケ、えーケンとマリが地図を見ていると、んバスケツトの中に、い犬がは入ってしまいました (JJJ12-ST1)

NNS) マリとケンは地図を見た時に、犬はバスケツトに入って、(GAT31-ST1)

(13) 過小使用語「てくる」

NS) するとバスケツトから、犬が出てきました (JJJ14-ST1)

NNS) いいところを見つけた時に、バスケツト開けたら、犬が出ました (FFR62-ST1)

(14) 過小使用語「てしまう」

NS) 二階に登ろうとしたところ警官が来てしまいました (JJJ14-ST2)

NNS) でもーその時、警官警官に、会いました (SES23-ST2)

RPの過小使用語からなる補助動詞には「ていただく」「てもらう」「てしまう」がある。「ていただく」は、使役を組み合わせた「させていただく」もあるため、4形式の例を(15)～(18)に示す。(15)(16)には、NS群の発話とほぼ同じ内容のNNS群の例を比較対象として示す。(15)ではNS群の述語末尾に用いられている「じゃないですか」「ていただきたい」「んですが」が、NNS群の発話には見られない。(16)の例も同様のことが言える。

(15) NS群「ていただく」

NS) あのー〈えー〉店長さん〈はい〉申し訳ないんですけど今三日ーで勤務してるじゃないですか〈はい〉ちょっと習い事を始めてしまっーて子供の事もあつー〈はい〉三日から二日にー変えていただきたいんですが (JJJ09-RP1)

NNS) すみません、〈はい〉はい、えー今はえーここにうーんうーん三日ええ〈うん〉働きますがええ、うん相談にううできればうう二日だけ働きたいと、思います (HHG16-RP1)

(16) NS群「させていただく」

NS) 今一週三日ーアルバイトで、仕事させていただいてるんですけども、ちょっと忙しくなりましてー (JJJ37-RP1)

NNS) 私は〈うん〉あと、普通一週間、三日、に、バイトをしていますから (IID19-RP1)

(17) NS 群「てもらおう」

NS) 週に二日に変えてもらえないかと思ってるんですけども (JJJ11-RP1)

(18) NS 群「てしまう」

NS) せっかくあの一上手く回っているところでー〈ええ、ええええ〉ご迷惑掛けてしま
うのもー (JJJ17-RP2)

「ていただく」「させていただく」についてももう少し詳細に見てみたい。NNS 群にもこれらの補助動詞の使用がないわけではないが、NS 群と比較すると大変少なく、依頼内容の行為者に関する誤用も目立つ¹⁶。また、NNS 群と NS 群では、使用する形式が異なっていることもわかった。表 14 に、依頼の交渉である RP1 における、NS 群と NNS 群の「頂く」を用いた表現形式の頻度上位 4 形式を示す。NNS 群では、「ていただけませんか」と「ていただけないでしょうか」の 2 形式と、使役が加わった「させていただけませんか」「させていただけないでしょうか」が上位 4 形式である。誤用もあるが、それも含め、この 4 形式で NNS 群の「頂く」の総出現数の 7 割を超える。一方、NS 群では、「ていただきたい (んですけど／と思って)」のように語尾を言い切らない形式や、「ていただけたら」「ていただければ」など条件形を用いた形式、状況説明表現として (16) に示したような「させていただいて (んですけども)」のような形式が上位に挙がる。表 14 からわかるように、NNS 群と NS 群の上位 4 形式はまったく重なっていない。NNS 群が多用する「ていただけませんか」「ていただけないでしょうか」を用いた (19) (20) は、文法的には間違っていないが、同様の内容で NS 群が「ていただきたいんですけども」や「ていただければと思うんですけども」のように、「たい」や「ばと思う」などを組み合わせたうえで「けれども」で言い切らない形式を用いる (21) (22) と比較すると直接的な印象を受ける。これらの対比は、RP における授受表現において、「いただく」「もらおう」が過小使用語で、「くれる」が過剰使用語というように相補分布をなしていた点と合わせて、重要な点である¹⁷。

表 14 RP1 における「頂く」を用いた表現の上位 4 形式 (カッコ内はその中での誤用数)

NNS 群の使用形式	出現数	割合	NS 群の使用形式	出現数	割合
させていただけませんか	19 (1)	26%	ていただきたい (んですけど等)	7	27%
ていただけませんか	17 (5)	23%	ていただけたら (と・ば・なら)	6	23%
ていただけないでしょうか	12 (5)	16%	させていただいて	4	15%
させていただけないでしょうか	7	9%	本動詞	3	12%
小計	55 (11)	74%	小計	20	77%
「頂く」の総出現数	74 (16)	100%	「頂く」の総出現数	26	100%

¹⁶ 話者が仕事を休みたいにもかかわらず、「店長、仕事を休んでいただけませんか」のように発話するような誤用を指す。

¹⁷ NNS 群のうち、日本国内で学習している JJC (教室環境学習者の ID)、JJN (自然環境学習者の ID) で「頂く」を用いた話者は 6 名であったが、うち 3 名は「ていただきたいんですけど」「ていただければ」を用いている。海外環境で日本語を学習する NNS と、日本で日本語を学習する NNS との違いについては、さらなる分析が必要な箇所である。

- (19) ちょっと一週間でえー二日間、に、変化、していただけますか？ (VVN21-RP1)
- (20) あの働くあの仕事の日はその一週、あ一週間あの三回から二回に、にしていただけないでしょうか？ (GAT37-RP1)
- (21) 今、週三で入らせているアルバイトの方を〈はい〉週二日にしていただきたいんですけれどもー (JJJ10-RP1)
- (22) 三日からー、ちょっと二日にえー減らしていただければと思うんですけれどもー (JJJ17-RP1)

6.2 時間関係の表現

時間軸に沿ってストーリーを述べていく ST においては、時間関係の表現は欠かすことができないが、NNS 群と NS 群とで差異が大きい。過剰使用語には、接続助詞相当句の「時」「後」の 2 語が ST1 と ST2 に共通して現れている。それに対して、過小使用語で構成される表現には「間」を用いた「その間に」「ている間に」や、「所」を用いた「～たところ」、「為る (する)」を用いた「とすると」「。すると～」(接続詞) などがあり、NS 群ではこのような表現が多用される。「時」と「後」は NS 群で低頻度で、両群の差異が大きい。

(23) ～ (25) に、NS 群と NNS 群が同じ場面について語った発話を示す。NS 群は、「間に」を使って同時に生起する事柄を述べ (例 (23))、「たところ」「すると」などを使って継起的な事柄について述べている (例 (24) (25))。NNS 群では、同時に生起する事柄にも、継起的な事柄にも「時」からなる表現が用いられており、これが NNS にとって使いやすい形式と認識されていることがうかがえる。

- (23) 過小使用語「間に」、過剰使用語「時」
- NS-a) 出かける前に二人が、えー地図を見ていると、その間に、犬が、バスケットの、中に入ってしまいました (JJJ01-ST1)
- NS-b) えーとケンとマリが、地図を見ている間に、バスケットの中に犬が入ってしまいました (JJJ03-ST1)
- NNS-a) ピクニックのためにー良いところを探しました # 地図で確認しました # その時は、犬ーはーあー、バスケットの中に、飛び込んでーし、しまいました (RRS57-ST1)
- NNS-b) そしてケンとマリは地図を、み、みえ、見えます時、あう、犬がバスケットに入ってしまった (IID19-ST1)
- (24) 過小使用語「たところ」「とすると」「。すると～」、過剰使用語「時」
- NS-a) そこで梯子を持ってきて自分で登ろう、二階に登ろうとしたところ警官が来てしまいました (JJJ14-ST2)
- NS-b) ケンが梯子を使って二階の窓から家に入ろうとすると、警官に見つかってしまいました (JJJ11-ST2)
- NS-c) 仕方がないので、家の外にあった梯子を持ってきて、二階に上がろうとしました #

すると、通りかかった警官に、職務質問をされました (JJJ57-ST2)

NNS) その後一梯子でうちに入りたかったけどその時に一警官がうー来たからー
ちょっと恥ずかしかった (GAT24-ST2)

(25) 過小使用語「たところ」「とすると」、過剰使用語「時」「後」

NS-a) えー騒ぎに気付いたマリがえー起きて窓から顔を出したところ、えー警官、え、えー
け、警官はえーとケン、ケン、ケンとケンがマ、マリの家、家の人であることに気づき、
えー気づいてえっと頭を下げました (JJJ12-ST2)

NS-b) 窓から入ろうと、えー梯子を伝って、えー、梯子の登って行くと、そこに、えー
警察の人が来て、「何をやっているんだ」と、えー、言われてしまいました#するとそこで、
マリが起きて (JJJ01-ST2)

NNS-a) でもケンさんは泥棒じゃ、泥棒えー泥棒じゃないでした#あとでマリさんは起
きて、えー警官さん、警官さんを見て (TTR14-ST2)

NNS-b) ケンを泥棒と感じて、注意をしてくれました#お、その時に、マリが起きて、あ、
ケンは私と知り合い人と言って (KKD41-ST2)

5 節の (9) (10) で、「やってくる」「ようとする」などが、ストーリーを語るというジャンルに
適した表現の選択であると述べた。本節の「すると」「たところ」なども、同様の観点から考
えることができる。蓮沼 (1993: 88) では、事実的な用法の「と」を「語りもの」で使用される
という文体的特徴を有するもの」とし、そのような「と」が含まれた文は読者に「語り」として
理解される、と述べており、NS 群はまさにそのような使い方をしている。

また、NNS のストーリーテリングを調査した栃木 (1990) や庄司 (2001) は、NS と対照的に
NNS で「時」や「あとで」などが多用されていることを指摘している。栃木 (1990) には調査
実施時の NNS のレベルが明記されていないが、おおよそ初級後半から中級と思われ、庄司 (2001)
は旧日本語能力試験の 1～2 級レベルの NNS を対象としている。多様なレベルの NNS に対す
る異なるイラストを用いたタスクにおいて、NNS に NS とは異なる時間表現が見られ、それが
本研究の結果とも重なる点は特筆すべき点であろう。

6.3 助詞

「は (係助詞)」と「から (接続助詞)」は、ST においても RP においても、過剰使用語として
挙がっており、かつ、常に上位 2 語の位置を占めている。NNS が原因・理由表現として「ので」
ではなく「から」に偏る点については、これまでも前原・菊地 (2005)、大関 (2008)、小西 (2010)
などで指摘されている。本節では、「は (係助詞)」と、「は (係助詞)」と相補的に用いられる「が
(格助詞)」について分析を行う。

6.3.1 ST における「は」と「が」

ST では、ST1 と ST2 の両方において、「は」が過剰使用語、「が」が過小使用語として挙がっ

ている。第3者の視点から独話形式でストーリーを語るというタスクの性質とも関連して、「は」と「が」のどちらを使うべきかという問題は、大きく分けて、①複文における主語、②談話におけるトピックの連続性・非連続性、という2つの観点から論じることができる。

まず、①については、従属節の従属度が低く、主節に近い働きをする場合を除いて、従属節と主節の主語が異なる場合、従属節の主語は「が」で表さなければならない（寺村 1991: 48-52, 日本語記述文法研究会編 2009a: 213 など）。しかし、NNS 群では「が」で表すべき箇所を「は」にする例が多い。(26) は従属節の主語は「ケンとマリ」、主節の主語は「犬」と異なっているにもかかわらず、どちらも「は」で表されている。本来であれば従属節の主語は「が」でなければならない。

②については、談話において新情報となる名詞句は「が」、既知の旧情報となる名詞句は「は」で表さなければならない（久野 1973, 日本語記述文法研究会編 2009b, 中浜 2013 など）。このようなトピックの連続性・非連続性は談話の一貫性を左右する。しかし、NNS 群では名詞句が何であれ「は」で表す例が多い。(27) は、ST1 の中で一度も「が」を使わず、「は」のみでストーリーを語っている NNS の例である。

(26) ケンとマリは、地図を見る時、犬は、ババケットに、入りました (JJC21-ST1)

(27) え、朝ケンとマリは、えーサンドイッチ、サンドイッチを、作りました # あーあとで、えー、ケンとマリは うー、地図を、えー読みながら、あ、犬は、うーピク、ニッ、クーのバスケケットに、えー食べ物を、んー、食べ物を探しました # え、あとで、まーと、マリと、ケン は うーピクニックへ、行きました # あとで、えー、えーケン は ピクニックバスケケットを、開けたり？ えー犬は、バスケケット、から、出ました # うーマリは ビックリしました # えー、あとでマリとケン は、う、うー、すみません、マリとケン は ピクニックへ、えー行きながら、えー犬は、え、バスケケットの中だ、中、中にある食べ物を食べました (TTR17-ST1)

表 15, 16 は、ST における「は」と「が」の使用状況を、前接する名詞句ごとに集計したものである。名詞句は、ST1 は「ケン」「マリ」「二人」「犬」に代表される 4 種、ST2 では「ケン」「マリ」「二人」「警察」に代表される 4 種¹⁸とし、それぞれの名詞句を検索したうえで後続する助詞を調べた。NS 群と NNS 群の調整頻度 (PTW) も示す。

¹⁸ 表 15, 16 について、「ケン」「マリ」「警察」は次のような名詞句を含む。「ケン」には「ケンさん」が含まれる。「マリ」には「マリさん」「ケンとマリ」「ケンとマリさん」が含まれる。また、「警察」には「警官」「お巡りさん」が含まれる。

表 15 ST1 における「は」と「が」

前接する名詞句	NNS 群		NS 群		NNS 群 PTW		NS 群 PTW	
	は格	が格	は格	が格	は格	が格	は格	が格
ケン	127	17	0	2	4.6	0.6	0.0	1.1
マリ	439	20	34	6	16.0	0.7	18.9	3.3
二人	117	21	8	3	4.3	0.8	4.4	1.7
犬	215	318	1	29	7.8	11.6	0.6	16.1
合計	898	376	43	40	32.8	13.7	23.9	22.2

表 16 ST2 における「は」と「が」

前接する名詞句	NNS 群		NS 群		NNS 群 PTW		NS 群 PTW	
	は格	が格	は格	が格	は格	が格	は格	が格
ケン	712	61	29	9	22.6	1.9	14.4	4.5
マリ	331	75	20	13	10.5	2.4	10.0	6.5
二人	8	0	0	0	0.3	0.0	0.0	0.0
警察	182	108	6	7	5.8	3.4	3.0	3.5
合計	1233	244	55	29	39.2	7.8	27.4	14.4

表 15 の ST1 では、特に「犬」において NNS 群と NS 群の差が際立っている。NS 群ではほぼ「が」で表されるが、NNS 群では「は」でも表されている。また、表 16 の ST2 では、NNS 群では全体的に「は」が多い。この差が、過小使用語として「が」、過剰使用語として「は」、という結果につながっていると考えられる。

ST における NS 群の「は」と「が」の使い分けは、①複文における主語、②談話におけるトピックの連続性・非連続性、という 2 つの観点相互に作用している。しかし、ST1 と ST2 のストーリーの違いによる若干の特性は見受けられる。NS 群の ST1 は、トピックの連続性・非連続性に関連する「は」と「が」の揺れが大変少なく、「ケン」と「マリ」が既知のトピックとして語られる中で「犬」が新出のトピックとして現れる、というトピックの語り方が一貫している。(28) (29) は、ST1 の 1 つ目のイラストのストーリーを語る中で「犬」が初めて言及される箇所であるが、どちらも「犬が」となっている。そのため、「は」と「が」の使い分けには、①複文における主語という観点だけでなく、②トピックの連続性・非連続性における観点も大きく働いている。一方、ST2 では、「マリ」が初出の場面でも、(30) (31) のように「は」格で示す NS が多く見られ、表 16 の NS 群における「マリ」の「は」格での出現数を押し上げている。そのため、「は」と「が」の使い分けは①複文における主語というルールによる面が大きい。このように、NS 群における「は」と「が」の使い分けは、タスクのストーリーの影響などからも ST1 と ST2 でまったく同じ傾向を見せるわけではない。

(28) 朝、ケンとマリはサンドイッチを作りました # えーピクニックに行こうと地図を見てえー、どこに行こうかえー話しています # その間に、知らない間にえー犬がバスケットの中に入り、気づかぬまま二人は楽しそうにお出かけです (JJJ17-ST1)

- (29) 朝, ケンとマリはサンドイッチを作りました#その後ろで, 犬が見ています (JJJ10-ST1)
 (30) ケンはうちの鍵を持っていませんでした#仕事で, 帰りが夜遅くなってしまったので, チャイムをな, お, 押しても, えーマリはぐっすりと寝ています (JJJ30-ST2)
 (31) ケンはうちの鍵を持っていませんでした#あー鍵忘れてしまったー#ケンはチャイムを押しています#でもマリは起きてきません (JJJ09-ST2)

しかし, NNS 群は, ST1 においても ST2 においても「は」を偏重し, また, (26) (27) にも示したように, ①と②のどちらにおいても誤用が見られる。NNS 群の「は」と「が」の使用を詳細に分析したところ, ST のタスクの中で一度も「が」を使わず, 「は」のみを使用した NNS は, ST1 で 43 名, ST2 で 56 名であった。NNS 群の母集団が 210 名であることを考えると, 決して少ない数ではない。「は」のみを用いた NNS は, ST1 と ST2 ですべてが重なるわけではなく, また, 韓国語母語話者を除くすべての母語でまんべんなく該当者がいた¹⁹。中級レベルの NNS の書き言葉のディスコースにおける問題点を調査した藤井 (2005) においても, ①複文における主語の観点や, ②談話におけるトピックの観点を考慮せず, 基本的に「は」を用いる NNS が多いことが報告されており, 発話を扱った本研究と同じ結果を示している。

6.3.2 RP における「は」と「が」

4.2 ~ 4.3 節でも述べたように, RP における NNS 群の助詞の過小使用語には格関係を示す語は少なかった。これは, NS 群が RP において婉曲表現や配慮表現を多用することだけでなく, 対話で話し手が 1 人称を省略しやすいことも関連していると思われる。そのため, 1 人称代名詞に後続する「は」について, NNS 群と NS 群を比較してみたい。

次頁の表 17 は, 1 人称代名詞「私」「僕」に後接する助詞をタスクごとに集計したものである。「その他」とは, 「は」「が」以外の助詞が後接する場合や, 「私」「僕」が述語の位置に現れている場合などを指す。NNS 群と NS 群の調整頻度 (PTW) も示す。また表 18 には「は」の総出現数の中で, 「1 人称+は」が占める割合を算出した結果を示す。

表 17 の NNS 群と NS 群を比較すると, RP1 と RP2 のどちらにおいても NNS 群の「1 人称+は」が際立って多いことがわかる。それに対して, NS 群は, 依頼のタスクである RP1 では「1 人称+は」をまったく用いていなかった。RP1 で用いられる「は」は, (32) のように人称代名詞以外を主題とするものであった。断りのタスクである RP2 では NS 群も「1 人称+は」を用いることがあり, それらは「接客から調理への仕事の変更を断る」場面が多い。「料理が苦手」「接客のほうがいい」のような断りを述べる発話であり, そこでは「1 人称+は」(例 (33)) だけでなく「1 人称+無助詞」(例 (34)) も使われる。このように, NS 群の 1 人称への言及の仕方は, タス

¹⁹ 韓国語母語話者に「は」のみを使用する話者がいなかったことは, 注目に値する。これは, 中浜 (2013) が, ナラティブにおけるトピックの連続性・非連続性に関する研究において, 日本語と近似する文法構造をもつ韓国語話者が, 中級レベルですでに不定性マーカーである「が」やゼロ照応の適切な使用が NS のレベルに達していると報告している点と同じ結果であると言える。本研究では, 母語別の分析は行っていないが, さらなる分析が必要な点である。

クの内容によってやや違いがあるものの、RP全体を通して「1人称+無助詞」のほうが多い点は共通している。一方、NNS群の「1人称+は」は、NS群と同様にRP2のほうが多いものの、PR1とRP2のどちらにおいても使用が見られる（例（35））。また、「1人称+は」と比較して「1人称+無助詞」は少なく、「は」の総出現数における「1人称+は」の割合もNS群より高い。

表 17 1人称代名詞に後接する助詞

後接助詞	RP1				RP2			
	NNS群	NS群	NNS群 PTW	NS群 PTW	NNS群	NS群	NNS群 PTW	NS群 PTW
は	291	0	7.3	0.0	547	7	13.4	2.5
が	32	1	0.8	0.3	65	6	1.6	2.1
無助詞	62	2	1.6	0.6	103	15	2.5	5.3
その他	183	4	4.6	1.3	278	8	6.8	2.9
合計	568	7	14.2	2.3	993	36	24.3	12.8

表 18 係助詞「は」の総出現数における「1人称+は」の割合

「1人称+は」	RP1		RP2	
	NNS群	NS群	NNS群	NS群
	24.3%	0.0%	32.3%	12.1%

- (32) このお仕事自体はすごい楽しいし、知り合いの方も増えてやりがい持ってるんですけど (JJJ30-RP1)
- (33) 私は接客する方が〈はい〉すごい好きなので〈はい〉、できたら接客の方に (JJJ14-RP2)
- (34) でもあの一、申し訳ありません私、ちょっとやっぱり料理は、自信がなくて (JJJ57-RP2)
- (35) んー、私はほんとほんと、あの料理が苦手だ、私は砂糖、砂糖か塩かは一あの、確認することがもうできませんなので (VVN31-RP2)

RP1では、「が」が過剰使用語であることも、STとは異なっている。表19に、RP1における「が」の前接語の頻度上位3形式を挙げる。

表19からわかるように、NNS群の上位3形式は、勤務日数を減らすための理由として述べる「時間（がない）」、「試験（がある）」の他に、「こと」が上がっている。「こと」を用いた表現の内訳は、「～したいこと」と「ことができます」の2形式が「こと」の総出現数の約6割を占める。「～したいこと」は「お願いしたいこと（があります）」「聞きたいこと（があります）」「話したい（ことがあります）」が多く、「ことができます」は「働くことができます」が多い（例（36）～（38））。どちらの形式も、初級の日本語教育で文型として扱う場合が多く、特に「お願いしたいことがあります」「聞きたいことがあります」は依頼会話における定型句として理解されているのではないかと思われる。一方、NS群にはこの種の「こと」は現れていない。

表 19 RP1 における助詞「が」の前接上位 3 語

NNS 群の使用形式	出現数	割合	NS 群の使用形式	出現数	割合
時間	118	15.9%	方 (ほう)	6	25.0%
こと	101	13.6%	人	2	8.3%
試験	50	6.7%	母	2	8.3%
「が」格の総出現数	743	100.0%	「が」格の総出現数	24	100.0%

- (36) あのー、お願いしたいことがあります (HHG51-RP1)
 (37) えーとうーん聞きたいことがあるんですが (TTH14-RP1)
 (38) あーそのー、うちのあー忙しい、忙しいあー時あー終わった、終わって、あー一週間にあー四日、おー四日を働くことができます (RRP45-RP1)

ここまで見たように、NS 群は「1 人称+は」をあまり用いずに会話を進めることや、無助詞の使用という観点において、NNS 群と異なっている。RP における NS 群の「は」の運用は、ST では複文の主語の観点やトピックの連続性・非連続性という観点で「は」と「が」の使い分けを行っていたのと比較すると、ずいぶん違う観点における運用であると言える。4.3 節でも述べたが、これは、NS 群がタスクの違いに応じて言語産出を変化させていることを意味している。それは、逆に言えば、NNS 群がそのような言語産出を行っていないということでもある。本節における「は」と「が」の分析からも、NNS 群が ST と RP のどちらにおいても「は」の偏重があり、独話形式のストーリー語りにおいても、交渉の会話においても、そのタスクに応じたルールを獲得し運用していくことに課題があることがわかる。

7. タスクの違いが産出語彙に与える影響

ここまで、過小使用語と過剰使用語の分析を通して、NNS 群の産出語彙の特徴や、NS 群との相違について述べてきた。本研究で対象とした NNS 群は中級レベルであるため、産出語彙において NS 群と相違があるのは当然である。しかし、本研究では異なるタスクを用いて比較したことによって、ST と RP における産出語彙の違いも明らかになった。本節では、タスクの違いが産出語彙に与える影響について、ジャンルと NNS 群のレベルという観点から考察する。

7.1 ジャンルの違い

過小使用語における分析を通して、NS 群は ST と RP というタスクの違いに対応した言語産出を行っていると言ってよいと考えられる。実質語がタスクそれぞれの話題に影響を受けるのは当然であるが、機能語においても ST と RP に違いが見られた。ST1 と ST2 のストーリーの違いや、RP1 と RP2 の依頼・断りといった機能の違いによって若干の傾向の差はあるものの、ST 群、RP 群として包括的に見た場合の機能語の分布の差は鮮明である。では、タスクのどのような違いが、機能語の分布の違いを生むのだろうか。

ST は、独話形式で第 3 者の視点からのストーリー語りであり、RP は、対話形式の依頼と断り

の交渉である。これらは、調査におけるタスクの違いを超えた言語活動のジャンルの違いがあると考えられる。小西 (2017) では、NS 群の ST と RP の産出語彙が、独話と対話というタスク形態によって識別できることを確認しており、また、話題の違いや機能の違いが産出語彙に影響を及ぼすことを示唆している。つまり、ST と RP は、独話と対話の違い、話題の違い、機能の違いなどが組み合わされ、ST 群、RP 群というそれぞれのジャンルを作り出していると考えられる。

ジャンルや場面の違いを分類し、定義づけを試みる研究は幅広く存在する。ここでは、具体的なジャンルの定義には踏み込まないが、過小使用語や過剰使用語として挙げた項目とジャンルの関連について考えることにしたい。たとえば、ストーリーテリングを対象とした言語研究では、談話の結束性や、時系列に出来事を語るときの語り方、視点などが課題になることが少なくないが (渡邊 1996, 栃木 1990, 南 2005 他)、そのような項目が研究対象になるのはそれがストーリーテリングというジャンルの言語活動の特徴であるからだと思われる。本研究で過小使用語として挙げた、語りの「と」を含む時間表現、トピックの連続性・非連続性に関わる「は」と「が」、視点と関わる「てくる」などは、それらの課題と一致している。また、交渉の対話に関する研究では、談話構成や、対人関係維持のための方略、特に依頼や断りの対話ではポライトネスの観点が研究課題の 1 つとなることが少なくない (生田 1997, 眞鍋 2013 他)。また、音声言語での他者との対話という大きなカテゴリで見た場合は、終助詞の使用や、1 人称の省略なども研究課題の 1 つであるだろう。過小使用語として挙げた婉曲表現・配慮表現、終助詞などは、それらの課題と一致している。

つまり、NNS 群が過小使用する語は、それぞれのジャンルが特性として内包している言語項目であると言える。NS 群は ST や RP がどのようなジャンルの言語活動であるかを理解し、そのジャンルに適した言語産出を行っているものの、中級レベルの NNS 群にとっては、そのようなジャンルの違いを把握して適切な言語産出を行うことが難しい、ということがわかる。

7.2 NNS 群のレベル

本研究で対象とした NNS 群は中級レベルである。NNS 群がジャンルに適した言語産出が行えない大きな要因は、NNS 群のレベルによるところが大きいと思われる。では、中級レベルとは、どのようなレベルなのであろうか。

中級レベルと上級レベルの NNS が自分自身の経験を語ったナラティブの構造を分析した南 (2005) では、上級の NNS が、ナラティブのトピックが静態的か動態的かに応じて比較的柔軟に言語形式を選択して対応するのに対して、中級の NNS はそうでないと述べている。また、中級レベルと上級レベルの NNS が行った依頼と断りの発話をポライトネスの観点から分析した眞鍋 (2013) は、中級の NNS は、直接的表現によって遂行できるタイプのタスクは容易だが、間接的表現を使いこなす必要のある社会的距離や負荷の程度の高いタイプのタスクは難易度が高いと述べている。このような先行研究は、上級レベルの NNS が多様な言語項目を適切に選択して運用できるのに対して、中級レベルの NNS の使用する言語項目が限定的であることを示してい

る。これは本研究の結果とも重なる。

KY コーパスを分析した山内（2009: 55-56）では、中級レベルで「ています・でいます」の形が出現し、縮約形の「てます・めます」や普通形の「ている・でいる」は上級レベルで出現すると述べられている。普通形の使用ができれば、「ている物」のような連体修飾や、「ているし」のような複文が形成できるようになるとも述べている。本研究でも過小使用語に上がった「ている」「てしまう」「ていただく」などの補助動詞や「という N」のような名詞節などは、初級の文法項目として提示されることも多いが、中級レベルでは、即時的な口頭表現において適切な運用が難しいことがわかる。

また、山内（2009）は、OPI の考え方に基づいた分析の中で、初級文法とは丁寧形の文法であるとしたうえで、中級で教えるべき文法は「文と文をつなぐための文法」であると述べている。そして、中級の NNS が「～たいです」「いいです」などと述べるのに対して、上級の NNS が「～たいと思います」「いいと思います」などと述べることを例に挙げて、中級レベルは「表出的」であり、上級レベルは「述べ立て的」であるとも指摘している。述べ立て的であるということが、ジャンルに応じた言語産出と読み替えられるのであれば、そのような発話に対する指導は上級レベルで行うことが最も効率が良いのかもしれない。しかし、その点を明らかにするためには、同条件で行われたタスクにおける上級レベルの NNS の産出語彙の分析を行う必要がある。

また、ジャンルに応じた言語産出とともに想起されるのは、「読む・聞く・話す・書く」というそれぞれの技能に必要な文法は異なっていると指摘した野田編（2005）の主張である。技能ごとに文法が異なるだけでなく、「話す」という 1 つの技能においても、独話形式でストーリーを語るタスクと、対話形式で交渉を行うタスクでは、言語産出において注意する側面が異なってくることは、これまでの多くの研究でも指摘されている。増田（2000）や藤井（2005）は、NNS の書き言葉のディスコースを分析し、ディスコースの観点を取り入れた文法指導が必要不可欠であると述べているが、発話においても同様のことが言える。これらの指導がどのレベルにおいて最も適切であるかについては、本研究で論じることができないが、中級レベルの NNS にとってこれらの点が課題であることは指摘しておきたい。

8. まとめと今後の課題

本研究では、I-JAS の ST と RP のタスクを用いて、中級レベルの NNS 群と NS 群の産出語彙の相違を分析した。特徴度の算出によって抽出された NNS 群の過剰使用語・過小使用語を質的に分析した結果、NS 群がジャンルに適した言語産出を行うのに対して、中級レベルの NNS 群にはそのような言語産出が見られないことがわかった。また、両群の差異について以下のような点が明らかになった。

- ① 補助動詞に関して、NNS 群の過小使用語は、ST では「ている」「てしまう」「てくる」、RP では「ていただく」「てしまう」「てもらう」があった。NNS 群の過剰使用語には「てくれる」があるが、NS 群はこれをまったく使用しない。また、「ていただく」を用いた

表現は、NNS 群と NS 群で使用形式が異なっている。

- ② ST の時間関係の表現に関して、NNS 群の過剰使用語は「時」「後」である。NS 群はジャンルに適した多様な時間表現を用いている。
- ③ 助詞に関して、NNS 群はどのタスクにおいても一貫して「は」を多用するが、NS 群は「は」と「が」を使い分け、タスクによって使い分けのルールも異なる傾向がある。

本研究で NNS 群の特徴として述べたことは、ベテランの日本語教師であれば、中級の NNS の特徴をよく示す語であると、経験的に想定できるものかもしれない。しかし、それが同条件で行われた NNS 群と NS 群の量的データと、その質的分析から明らかになった点は意義がある。また、授受表現や「頂く」を用いた依頼表現などに関して、NNS 群と NS 群に相補的な形式の分布がある点も、重要な指摘であると考えられる。

中級レベルと上級レベルの NNS を分析した先行研究の結果と重ね合わせると、タスクの異なりに応じた言語産出は中級レベルで達成することが難しい課題であるのかもしれない。しかし、それを明らかにするためには、同条件で行った上級レベルのタスクを分析する必要がある。I-JAS の追加データの公開を待って、さらなる分析を行い、上級レベルの NNS 群と NS 群の相違点についても明らかにしていきたい。

参考文献

- 藤井典子 (2005) 「日本語学習者のディスコースにおける問題点 ディスコース文法を教える必要性」南雅彦 (編) (2005), 37-48.
- 蓮沼昭子 (1993) 「「たら」と「と」の事実的用法をめぐって」益岡隆志 (編) 『日本語の条件表現』73-97. 東京: くろしお出版.
- 生田少子 (1997) 「ポライトネスの理論」『言語』26(6): 66-71.
- 石黒圭 (2016) 「日本語教育専攻大学院留学生のための語彙シラバス」森篤嗣 (編) (2016), 159-178.
- 石川慎一郎 (2008) 『英語コーパスと言語教育—データとしてのテキスト』東京: 大修館書店.
- 石川慎一郎 (2012) 『ベーシックコーパス言語学』東京: ひつじ書房.
- 小西円 (2010) 「日本語学習者による「から」と「ので」の使い分け—運用と意識に着目して—」『多摩留学生教育研究論集』7: 1-7.
- 小西円 (2017) 「「多言語母語の日本語学習者横断コーパス」の母語話者データにおけるタスクと産出語彙の関連」『言語資源活用ワークショップ 2016 発表論文集』95-103.
- 久野暲 (1973) 『日本文法研究』東京: 大修館書店.
- Leech, Geoffrey (2008) 「序文」シルヴィアン・グレンジャー (編著) 船城道雄・望月通子 (監訳) 『英語学習者コーパス入門』xi-xviii. 東京: 研究社.
- 前原かおる・菊地康人 (2005) 「学習項目の提示順序の再検討による教育改善の可能性—理由の「から」「ので」を例に—」『2005 年度日本語教育学会春季大会予稿集』288-289.
- 眞鍋雅子 (2013) 「ポライトネスの視点から見た中上級日本語学習者の発話: 依頼と断りの発話行為より」『言語科学研究: 神田外語大学大学院紀要』19: 77-100.
- 増田真理子 (2000) 「日本語学習者と母語話者のストーリーテリング文を比較する—4 コマ漫画のストーリー内容を書いたテキストの分析から—」『多摩留学生センター教育研究論集』2: 13-25.
- 南雅彦 (2005) 「日本語学習者のナラティブ ラボヴィアン・アプローチ」南雅彦 (編) (2005), 137-150.
- 南雅彦 (編) (2005) 『言語学と日本語教育 IV』東京: くろしお出版.
- 森篤嗣 (2016) 「子どもを持つ外国人のための語彙シラバス」森篤嗣 (編) (2016), 179-196.
- 森篤嗣 (編) (2016) 『現場に役立つ日本語教育研究 2 ニーズを踏まえた語彙シラバス』東京: くろしお出版.
- 中浜優子 (2013) 「タスクの複雑さと言語運用 (正確さ, 複雑さ, 談話の視点設定) との関連性」『第二言語としての日本語の習得研究』16: 38-55.

- 中俣尚己 (2016) 「学習者と母語話者の使用語彙の違い—『日中 Skype 会話コーパス』を用いて—」『日本語／日本語教育研究』7: 1-14.
- 日本語記述文法研究会 (編) (2009a) 『現代日本語文法 5 第 9 部とりたて 第 10 部主題』東京: くろしお出版.
- 日本語記述文法研究会 (編) (2009b) 『現代日本語文法 7 第 12 部談話 第 13 部待遇表現』東京: くろしお出版.
- 野田尚史 (編) (2005) 『コミュニケーションのための日本語教育文法』東京: くろしお出版.
- 小椋秀樹 (2014) 「形態論情報」山崎誠 (編) 『講座日本語コーパス 2 書き言葉コーパス 設計と構築』68-88. 東京: 朝倉書店.
- 大関浩美 (2008) 「学習者は形式と意味機能をいかに結びけていくか—初級学習者の条件表現の習得プロセスに関する事例的研究—」『第二言語としての日本語の習得研究』11: 122-140.
- 迫田久美子 (2016) 『海外連携による日本語学習者コーパスの構築—研究と構築の有機的なつながりに基づいて—I-JAS 構築に関する最終報告書』(平成 24-27 年度科学研究費助成事業 (基盤研究 A) 課題番号: 24251010 研究代表者: 迫田久美子).
- 迫田久美子・小西円・佐々木藍子・須賀和香子・細井陽子 (2016) 「多言語母語の日本語学習者横断コーパス」『国語研プロジェクトレビュー』6(3): 93-110.
- 庄司恵雄 (2001) 「日本語学習者のストーリー・テリングは語彙選択から見て日本語母語話者とどこが違うか」『群馬大学留学生センター論集』1: 1-12.
- 高見敏子 (2003) 「『高級紙語』と『大衆紙語』の corpus-driven な特定法」『大学院国際広報メディア研究科言語文化部紀要』44: 73-106. 北海道大学.
- 田中牧郎・近藤明日子 (2011) 「教科書コーパス語彙表」『言語政策に役立つ, コーパスを用いた語彙表・漢字表等の作成と活用』55-63. (文部科学省科学研究費特定領域研究「日本語コーパス」言語政策研究班報告書 JC-P-10-01).
- 寺村秀夫 (1991) 『日本語のシンタクスと意味 III』東京: くろしお出版.
- 栃木由香 (1990) 「日本語学習者のストーリーテリングに関する一分析 話の展開と接続形式を中心に」『筑波大学留学生教育センター日本語教育論集』5: 159-174.
- 渡邊亜子 (1996) 『中・上級日本語学習者の談話展開』東京: くろしお出版.
- 山内博之 (2009) 『プロフィシェンシーから見た日本語教育文法』東京: ひつじ書房.

関連 Web サイト

- 多言語母語の日本語学習者横断コーパス (I-JAS) (国立国語研究所)
<https://ninjal-sakoda.sakura.ne.jp/lsaj/>

Differences in Words Used by Learners of Japanese and Native Speakers: I-JAS Comparison Using Different Tasks

KONISHI Madoka

Postdoctoral Research Fellow, JSL Research Division, Research Department, NINJAL

Abstract

This study used the International Corpus of Japanese as a Second Language (I-JAS) to compare speech produced by intermediate-level non-native speakers (NNS) of Japanese with that of native speakers (NS) of Japanese from the perspective of vocabulary. From the different tasks assigned from this corpus, words that were underused and overused by NNS were extracted, and the results were subjected to qualitative analysis. The tasks used in this survey included two types of storytelling (ST) and two types of role-play (RP) concerning request and refusal. The results of the analysis show that the NS group produced vocabulary that was suited to the genre, whereas the intermediate-level NNS group did not. Moreover, the following differences between the NNS and NS groups were found: (1) With regard to use of auxiliary verbs, the words overused by the NNS group in RP were “te-kureru,” but the NS group never used this word. Additionally, the manner in which “te-itadaku” was used differed between the NNS group and NS group. (2) With regard to time-related expressions in ST, the words overused by the NNS group were “toki” and “ato.” (3) Regarding particles, the NNS group mostly used “wa” in all tasks.

Key words: learner corpus, I-JAS, underuse, overuse, task differences